

フェルガナ地方ムンチャク・テパ遺跡出土の絹織物

村 上 智 見*

Silk Textiles from Munchak-tepa in the Fergana Valley

Tomomi MURAKAMI

要 旨

中央アジアのウズベキスタン共和国フェルガナ地方に位置する4～7世紀のムンチャク・テパ遺跡では、複数の墓から衣服が出土した。ムンチャク・テパ遺跡から出土したこれらの衣服は、有機質が残存しにくい当該地域において希少な実物資料となっている。衣服を構成する織物の種類は、平織物、平地綾文綾、緯錦であり、材質は一部に付着している棉の平織物を除いて、全て絹であった。織物の種類や糸の撚りなどの技法、繊維材質、そして文様などから、中国製や現地製と考えられる織物の特徴が確認できた。

キーワード：考古学、染織、シルクロード

I. はじめに

フェルガナ地方は現在のウズベキスタン共和国、キルギス共和国、タジキスタン共和国にまたがる盆地を指し、古代中央アジアにおいて重要な文化史的地域の一つである。水が豊富で肥沃なこの盆地には、その地理的重要性から多くの遺跡が点在している（図1）。その一つであるムンチャク・テパ遺跡では、3～7世紀に属すると考えられる墓から有機質遺物が良好な保存状態で出土している。雨季にまとまった降水量があり乾湿を繰り返すウズベキスタンの地では、元来織物などの有機質は残りにくい¹⁾、ムンチャク・テパ遺跡の場合は、千数百年間の長期にわたって墓抗内に水がほとんど侵入せず、また風に晒されることもなく空間が保たれたことにより、多数の織物が良好な保存状態で残存した。これらは被葬者の衣服であり、材質は繊維材質中でも最も高価な絹である。さらに絹織物の中でも特に高価な錦や綾が出土していること、そして衣服としての原形を留めた保存状態の良さも資料の価値を高め、当該地域および周辺地域における古代衣服の希少な実物資料であるとともに、染織・服飾研究においても重要資料となっている。

2010年にウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所の Matbabaev Boqijon 氏と中国絲綢博物館の趙豊氏によって、織物の詳しい調査報告書が刊行されたが²⁾、筆者は報告書に掲載されていない平成27年10月1日受理 *日本学術振興会特別研究員PD（帝塚山大学）

ない未調査資料を含めた全体的な調査を行った。本稿ではムンチャク・テパ出土織物について概説するとともに、新たに確認した錦・綾織物の特徴について考察する。

Ⅱ. 遺跡の概要と資料について

フェルガナ地域は、天山山脈西端および東西トルキスタンを隔てるパミール山系北端の峰々に三方を囲まれた盆地であり、古来シルクロードの本道が通る交通・軍事の要衝であった。フェルガナ盆地は中央アジアでも特に肥沃な地域の一つであり、天山山脈に源を発する大河シルダリアをはじめ、山々から流れ出る大小の河川が盆地を潤している。交通の要衝であり肥沃な土地であるフェルガナ盆地には、各時代の遺跡が集中している。

当該地域は漢代には「大苑」と呼ばれるようになり、張騫が大月氏を訪ねてこの地を通り³⁾、武帝が汗血馬を求めて遠征軍を派遣したことでも有名である⁴⁾。西晋以後はフェルガナの音訳である「破洛那」が用いられた。経典を求めてインドへ旅立った玄奘三蔵もフェルガナ盆地を通ったことが『大唐西域記』の記述から知ることができる⁵⁾。フェルガナの名が各時代の資料中に幾度も登場することからも、その重要性を伺い知ることができる。

このフェルガナ盆地の中部にムンチャク・テパ遺跡は位置している(図2)。小高い丘を形成する遺跡の崖下にはシルダリヤ川が流れている(図3)。遺跡の年代は諸説あるが、3～7世紀にかけて築かれた墓地であり、埋葬者は同地域に居住していた人々と考えられる(図4)。発掘調査では土器、紡錘車、ガラス製装飾、青銅製品などの副葬品や人骨などが発見されている。高価な絹織物を身に着けていたことから、ある程度の身分にあった人々の墓と推測できる。

特筆すべきは良好な保存状態で出土した多くの有機質遺物である。当該墓地では棺内の空間が保たれていた為であろう(図5・6・7)、元来残存しにくい有機質遺物が今日まで保存されていた。被葬者が眠る棺は植物の蔓を編んだ籠棺であり(図8)、つい最近作られたかのような完全な形状を留めている。衣服も同様に原型を復元できる形状を留めており、織物としての柔軟性や艶も残されていた⁶⁾。

Ⅲ. 観察結果

衣服は縫い糸が劣化により消滅し、縫合部分が外れた状態のものが多い。衣服を構成する布の大部分は絹製の平織であるが、絹の緯錦がアクセントとして用いられたり、一部に棉製の平織物の痕跡も見られた。綾織物は覆面にのみ用いられていた。

さらに報告書に掲載されていない緯錦と綾織物も確認できた。綾織物は死者の顔に被せられた覆面であり、ムンチャク・テパの覆面としては、確認済みの綾織覆面・平絹覆面に続き3例目である。このように死者の顔を覆う絹の覆面は、フェルガナ南部のカラブラク墓地、セミレチエ、ケンコル墓地などでも出土している⁷⁾。

以下に織物の概要と観察結果を記す。

1. 平織物

平織物は織物の基本的な技法である三原組織⁸⁾であり、最も単純な織り組織である。当該遺跡から出土した織物の大部分は絹の平織物である(図9・10)。衣服を構成する布の大部分がこの平織物であり、結紐や襟の縁飾りなど一部にアクセントとして錦が使用されている。その他、平織の絹は被葬者の顔に被せる覆面、衣服のリボンや刺繍状の装飾などにも使用されていた。

衣服に用いられた平織の織密度は、経糸46～56本・緯糸32～42本(1cm間)程であり、単糸径は経糸・緯糸ともに0.1～0.2mmである。隙間ができないようしっかりと製織されている。経糸緯糸どちらも撚りのない引き揃えの絹糸を使用しており、単糸の径にばらつきがなく均一である。絹糸は劣化によって黒く変色しているものも一部に見られるが、光沢を失っていないものも多い。

衣服に施された刺繍状の装飾には、平織を紐状に細く丸めたものを使用していた。これらはすべて衣服から外れた状態で出土したが、平織紐で様々な模様を形成して衣服に縫い付けていたのだろう。文様の形状が残っているものがわずかに残存している。紐や刺繍で文様を施す例は古くから存在しているが、当該地域での出土は同国カンカ遺跡出土の7世紀アップリケ織物に続き2例目である。また、当該資料のように平織物を丸めて紐状とした例は、他地域にも見られず、やはり同国カンカ遺跡出土のアップリケ織物の縁飾り以外に見られない。当該地域特有の技法である可能性もあり着目される。

覆面に用いられた平絹は非常に薄く、衣服の平織と比較すると光沢と柔軟性がある。織密度が低いためだろうか、緯糸間には隙間があり縞文様を呈している(図11・12)。このような緯糸間の隙間現象は、我が国の正倉院宝物中の平織物にも見られる⁹⁾。現在のところ、劣化により緯糸が緩んで自然に隙間が生じ縞文様になったと考えているが、故意に隙間を設けた縞文平織物が、同国サマルカンド近郊のカフィルカラ遺跡において2014年に発掘された¹⁰⁾。このカフィルカラ遺跡出土の棉の縞文平織物には、経緯数本おきに規則的な隙間が見られ、故意に縞文様を設けたことが明らかである。このような技法は筆者が知る限り他に例はなく、当該地域独自の技法の可能性もある。ムンチャク・テバ出土の縞文状平織物が、経糸緯糸ともに1本ずつ交差させるのに対して、カフィルカラ出土の縞文平織物は緯糸3本を束にしてまとめ経糸と交差させるという違いはあるものの、基本的な織技は同じである。ムンチャク・テバ出土の縞文状平織物に関しても、故意に隙間を設けた可能性は否定できず、今後類似資料の増加を待って慎重に検討していきたい。

2. 緯錦

錦は経糸で文様を表す経錦と、緯糸で文様を表す緯錦に大別される。経錦は古いものではシベリアのアルタイ古墳群において紀元前5～3世紀のものが見つかっている¹¹⁾。緯錦は、中国の技術である平組織経錦の影響を受け西方で生み出された技法であり、絹の平組織緯錦が新疆地域で作られるようになったのは4世紀のことと考えられている。さらに平組織緯錦は綾組織緯錦へと発展していくことになる。緯錦は経錦よりも効率的に製織でき、多数の色糸を使用し、複雑で華やかな大柄文様も織り出せたことから、しだいに経錦に代わって製作されるようになった。日本では天平14年(742年)の緯錦が最も古い例と考えられており、以降緯錦の割合が増えていく。ソグディアナ地域および周辺地域においては、タジキスタンのムグ山城遺跡出土のソグド錦の他、

コーカサス地方モシチェバヤ=バルカ遺跡や中国新疆などでも、緯錦のソグド錦が出土している。

ムンチャク・テバ遺跡からは緯錦が12点ほど発掘されており、そのうち9点が平組織緯錦、3点が綾組織緯錦であった。筆者が行った調査では、未整理の錦を1点確認した。これらの錦は、平絹の衣服の裾や襟のアクセントとして、また飾り紐などに用いられたものである(図13・14)。ほとんどの錦は経糸・緯糸ともにZ方向に強く撚られた糸を使用している。Z撚りは毛織物文化圏で作られる糸によく見られる特徴であるとされており、ソグド錦にも多用される。織密度は経糸12本・緯糸30本(1cm間)であり、単糸の径が経糸0.2cm・緯糸0.5cm程度である。中国錦やペルシア錦と比較すると織りは粗い。また、平織に使用されている絹糸は、径にばらつきがなく均質であり、撚りもなく光沢が優れるのに対し、錦は材質・技法ともに劣る印象である。紬糸を使用したのかもしれない。このような糸質の違いも絹織物の製作地による違いを表す重要な要素になり得るため、今後資料の増加を待ってデータを積み重ねていく必要がある。

ムンチャク・テバ錦は殆どのが色彩を失い、色彩が残っているものも断片状のため文様の判別が難しい。趙豊氏らによって文様の復元が行われた錦が1点あるが、筆者が同錦の調査を行った時には、さらに劣化が進行した状態であり、所々わずかに色彩を残すのみであった。筆者の調査では文様の復元を行うことはできなかったが、趙豊氏の文様復元図によると、2段の連珠の下に何らかの2種の文様が交互に配されていることがわかる(図15・16)。このような簡略化された文様は中央アジア的であることから、当該錦も在地あるいはソグディアナなど周辺地域で製作されたと考えられる。

3. 綾

綾組織は西方で発達した毛織物に用いられた技術であり、中央アジアでは紀元前9世紀の毛の綾織が見られる¹²⁾。中国では1世紀頃から製作されるようになり、さらに東方へもたらされ、5世紀には日本でも製作された。しかし、平組織の地に綾組織で文様を織り出す平地綾文綾は中国起源であり、すでに殷・周時代から製作されていた。綾組織の地に綾組織で文様を織り出す綾地綾文綾は、唐代中頃に西の綾織技術の影響で出現したと考えられている。

すでに調査が行われている平地3/1経綾文綾(図17・18)は、3~6世紀に属する菱形と山形文が織り出された綾であり、死者の顔を覆った覆面である。5つの断片からなり、布丈は40cm×25cmの長方形である。組織は平地3/1経綾文綾であり、文様部分の綾組織は両流れである。1cm間の単糸本数は経糸70本、緯糸64本である。材質は絹であり、単糸に撚りは見られない。単糸の径は経糸・緯糸ともに約0.1mmである。黄褐色を呈し、絹本来の艶と織物の柔軟性を保っている。すでに趙豊氏らによる詳しい報告があり、幅約0.6cmの耳が確認されている。

趙豊氏らによる調査報告書に記載がなく、2012年にBadanova氏の論文で紹介されたもの、これまで詳しい報告のない綾織物を観察した。当該資料もまた被葬者の顔を覆った覆面布であり、ムンチャク・テバ出土の綾織物としては2例目である。平地1/3緯綾文綾(図19・20)は、菱形と線状文様の織り出された綾である。それぞれ9.5cm×3.5cm、8cm×5.5cmの2断片からなり、同一の布と思われる。組織は平地3/1緯綾文綾であり、文様部分の綾組織は片流れである(図21・22)。幅約0.4cmの耳が残存し、耳から幅約0.6cmの範囲は文様のない平織部分が設けられている。1

cm間の単糸本数は経糸60本、緯糸56本である。平地綾文綾では文様部分の浮きが表裏で異なる。片面は経糸の浮きによって、もう片面は緯糸の浮きによって文様が現れるが、緯糸の浮きで文様が現れる面のほうが文様が明瞭であり、こちら側を表と判断した。材質は絹であり、単糸に撚りは見られない。単糸の径は経糸0.1mm、緯糸0.2mmである。やや黒ずんだ茶褐色を呈しており、経年劣化による変色が激しいが、絹本来の艶と織物の柔軟性を保っている。

IV. まとめ

ムンチャク・テパ出土織物は現地（または周辺地域）製と中国製織物が混在しており、緯錦には現地（または周辺地域）製の特徴が、綾織物には中国製の特徴があることが分かった。文様のない平織物に関しては、織密度や糸の撚りなどの技法面で製作地の特徴を探る必要がある。当該遺跡出土の平織物は、単糸に撚りがなく、単糸径も均一であり、また織密度も高いことから、中国製との明確な差は見られなかった。しかし、平織物のような単純な技法の織物は、広範囲で特徴が類似する可能性があり、製作地を特定するのは困難である。しかし、生糸や紬糸などの糸質の違いによって、製作地を絞り込める可能性は大いにある。さらに、絹繊維の径や表面・断面形態などを詳細に調査し、地域ごとに絹繊維に差が見られないか検証していく必要もあるだろう。製作地特定のためには、さらに多くのシルクロード出土織物を比較し、各々の特徴を検証していくことが重要である。

ムンチャク・テパ出土の2点の綾織物は、文様・技法ともに中国製の特徴を持つ平地綾文綾である。両者は経綾文と緯綾文、両流れの綾文と片流れの綾文、山形文様と菱形文様という違いがあり、同じ平地綾文綾でもタイプが異なることがわかった。綾文綾は経糸の浮きの裏側は緯糸の浮きであるため、どちらを表とするかで経綾文か緯綾文か組織の名称が変わる。漢代の綾文綾の場合は、緯糸よりも密度が高い経糸の浮きで施文した方が文様が明瞭であるため、経綾文綾が一般的であるとされる。ムンチャク・テパ出土の平地綾（1/3緯綾）の場合は、経糸本数が緯糸本数より10本程度上回る。しかし、経綾文を表として見ると、緯綾文側を表として見た場合よりも文様が不明瞭であることから、緯綾文綾とするのが自然と思われた。緯綾文綾側の文様が明瞭である理由として、文様を織り出すための織機の付属品である文綜統が、文様部分の緯糸を上を持ち上げ、張力が緩められることが考えられる。

この2点の平地綾文綾は、文様・技法ともに中国国内で出土する平地綾に見られるタイプである。同様の山形文・菱形文は、日本の6世紀古墳や、7～8世紀の法隆寺・正倉院宝物などでも確認できる¹³⁾。ムンチャク・テパ出土の平地綾が、中国特有の文様・技法を用いていることは間違いなく、製作地は中国である可能性が高い。しかし、紀元前1世紀～紀元1世紀に属するハルチャヤン、ティリヤテベ、カンピルテペなどから出土した絹織物が、現地産の可能性が指摘されていることから、製作地特定にはさらなる調査の積み重ねが必要である。現地あるいは中国の影響を強く受けた中国西部地域で製作された可能性も排除できないことから、今後さらにこのタイプの綾文綾との比較を進め、資料数の増加を待つて慎重に検討していく必要がある。

緯錦も同様に、文様・技法ともに地域色が見られ、在地あるいは周辺地域で製作された可能性が

高いが、中国西部地域との類似性も見られることから、今後より多くの資料と比較することで、製作地別の織物の特徴をさらに明確にしていきたい。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所の Berdimyrodov Amridin 所長、Matbabaev Bokijon 先生、帝塚山大学の宇野隆夫先生、奈良大学の西山要一先生、国士舘大学イラク古代文化研究所の坂本和子先生にご指導ご高配を賜りました。その他ご協力くださいました皆様に心から感謝申し上げます。

本研究はみずほ国際交流奨学財団研究助成 (2011~2012年)、および日本学術振興会特別研究員PD研究助成 (2013年~2015年) による研究成果の一部です。

注

- 1) これまで中央アジアおよび周辺地域における古代の衣服の出土例は、タリム盆地の各地の出土品が知られ、現タジキスタンのムグ山 (7世紀頃)、ロシアのパジリク古墳 (紀元前5世紀~紀元前2世紀)、カタンダ遺跡 (紀元前5~紀元前4世紀)、アク・アラハ遺跡 (紀元前5世紀~紀元前2世紀)、モンゴルのノイン・ウラ古墳 (紀元前1世紀~1世紀)、北コーカサス地方のモシチェヴァヤ・バルカ遺跡 (8世紀~9世紀) などがある。
- 2) 马特巴巴伊夫・趙豊『大宛遺錦』2010
- 3) 『史記』大宛列伝
- 4) 『漢書』西域伝上
- 5) 『大唐西域記』に、フェルガナ盆地南部に存在していたと考えられる烏孫の本拠地「統葉城」が登場する。またフェルガナの風俗について以下のような記述がある。「氈や褐を身に着け、皮や氈を着ている。裳も服も狭く、身にぴったりとし、頭髪を整えて頭頂を出しているか、或いはまったく剃り、絵彩を額に巻く。体つきは大きい、性格は憶病であり、風俗は軽薄で、詐欺がまかり通っている。おおむね欲張り、父子ともに利殖をはかっている。財産の多いものを貴とし、身分の優劣の区別がない。たとえ巨万の富を持ったものでも、衣食は粗悪である。力田 (農民) と逐利 (商人) が半ばしている」。
- 6) 発掘後に適切な環境下で保管できなかったことや、博物館の脇を流れる川が氾濫し収蔵庫に水が流れ込んだことで、近年織物の急速な劣化が問題となっている。早急な保存処置が望まれる。
- 7) エドヴァルド・ルトヴェラゼ・加藤九祚訳「考古学が語るシルクロード史」平凡社、2011年、p.231
- 8) 織物の基本となる、平織り・斜文織り・縹子織りの三組織のことを、織物の三原組織という。
- 9) 第66回正倉院展に出品された伎楽衣装の平織布袍に同現象を確認した。
- 10) 村上智見「日本西アジア考古学会 第20回大会要旨集」『カフィルカラ遺跡出土織物類の調査』日本西アジア考古学会、2015年、pp.103-104
- 11) アルタイ古墳群は紀元前5~3世紀の古墳群であり、ロシアのアルタイ山中に位置している。凍結墳墓であったことから繊維製品が良好な保存状態で発見された。経錦、絹の刺繍などの中国製品、西アジア製と考えられる最古のパイル絨毯や毛綴織、その他多様なフェルト製品などが知られる (Rudenko, S. I.1970 *Frozen Tombs of Siberia*. University of California Press, Berkeley & Los Angeles., p. 206)。
- 12) 「平地綾」は、中国では「綺」と表現される。

- 13) 澤田むつ代『上代裂集成－古墳出土の繊維製品から法隆寺・正倉院まで』2001年

引用文献

- 1) 马特巴巴伊夫・趙豊『大苑遺錦』上海古籍出版社、2010

参考文献

- 1) 马特巴巴伊夫・趙豊『大苑遺錦』上海古籍出版社、2010
- 2) Матбобоев Боқижон, ”ҚАДИМГИ ФАРФОНАНИНГ ИЛК ЎРТА АСРЛАР ДАВРИ МАДАНИЯТИ”, (V-VIII асрлар археологик манбаларининг тарихий таҳлили асосида), Ўзбекистон Республикаси Фанлар Академияси Самарқанд бўлими Я. Фуломов номли Археология институти, 2009
- 3) Е.И. Баданова, “ТЕКСТИЛЬ ФЕРГАНСКОЙ ДОЛИНЫ В ЭПОХУ РАННЕГО СРЕДНЕВЕКОВЬЯ” (на примере Мунчактепа), (O’ZBEKISTON MODDIY MADANIYATI TARIXI 3 – NASHRI), O’ZBEKISTON FANLAR AKADEMIYASI ARXEOLOGIYA INSTITUTI, 2012
- 4) 坂本和子『織物に見るシルクロードの文化交流』同時代社、2012年
- 5) エドヴァルド・ルトヴェラゼ・加藤九祚訳「考古学が語るシルクロード史」平凡社、2011年
- 6) 澤田むつ代『上代裂集成－古墳出土の繊維製品から法隆寺・正倉院まで』2001年

Summary

Several cloths were found at Munchak-tepa (4-7 centuries) in Fergana valley of Uzbekistan. These textiles are produced by three methods: plain weave, twill weave and weft-faced compound twill. The material of all textiles, except for one plain-woven cotton partially attached, is silk. From the weaving techniques, thread twists, materials and patterns, peculiarities of China and local area of textiles were identified.

Key words: Archaeology, Textile, Silkroad

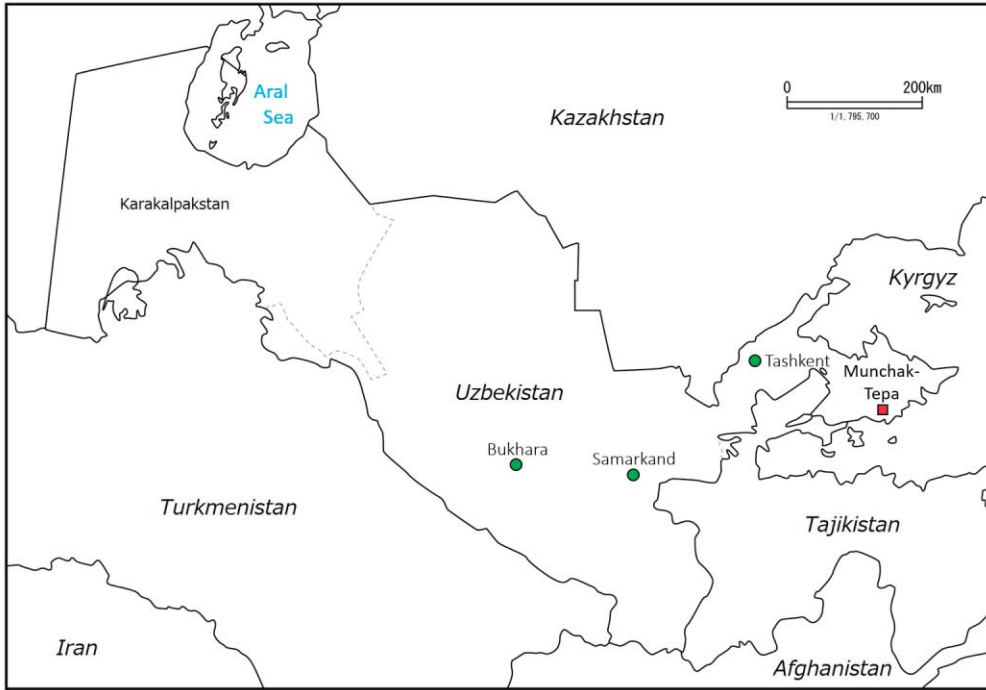


図1 フェルガナ周辺の歴史的地域と遺跡の位置



図2 ムンチャク・テパ遺跡



図3 ムンチャク・テパ遺跡とシルダリヤ

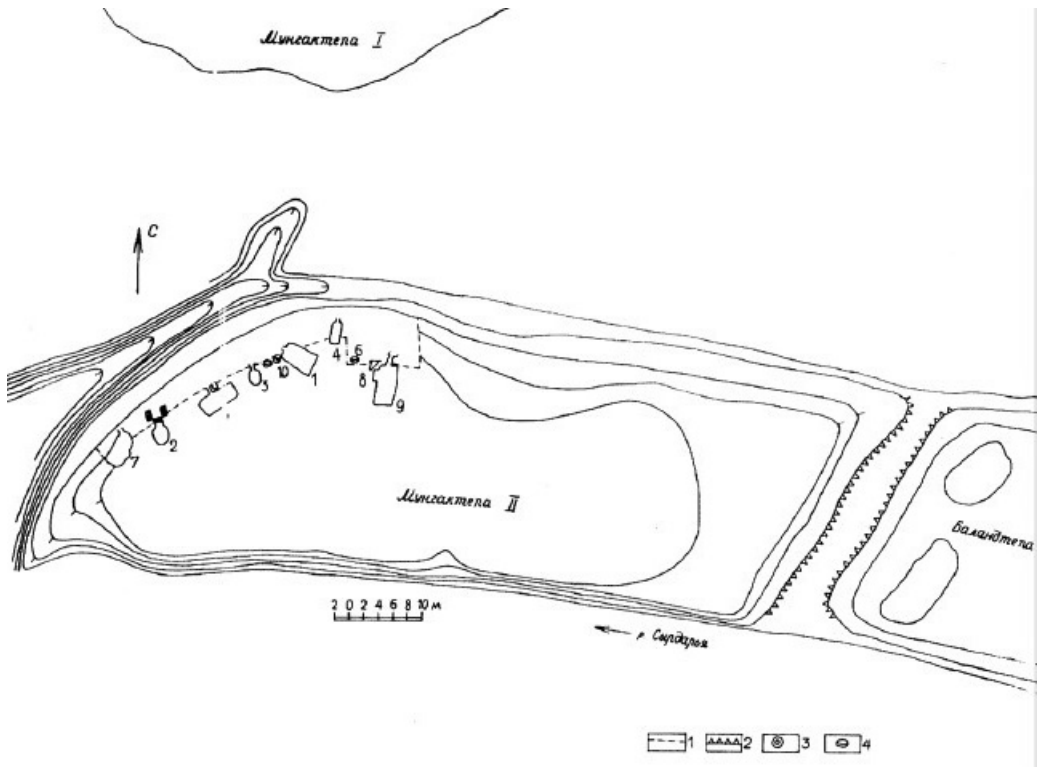


図4 ムンチャク・テバ遺跡と墓抗の位置
(Матбобоев Бокижон 2009)

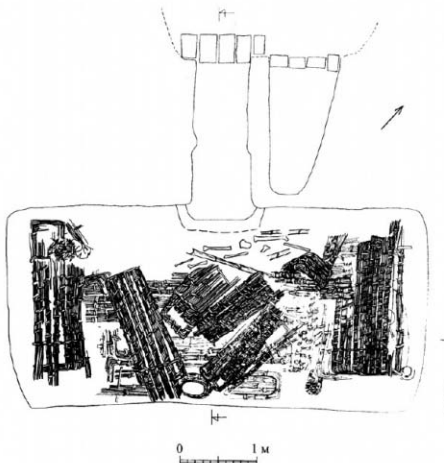


図5 墓墳平面図
(Матбобоев Бокижон 2009)

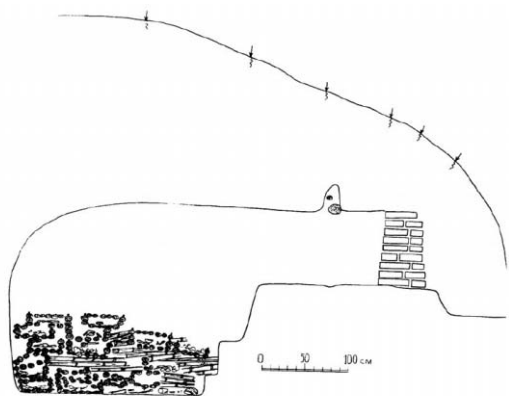


図6 墓墳断面図
(Матбобоев Бокижон 2009)



図7 発掘後の墓壙口

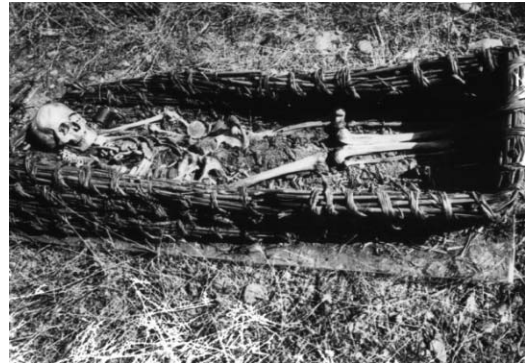


図8 籠棺 (Matboboeв Boқижон 2009)



図9 平織の貫頭衣 (保存修復済み)



図10 平織の袴 (未保存修復)



図11 覆面に用いられた平織物



図12 図6の拡大



図13 貫頭衣の襟飾り



図14 図8の緯錦部分拡大

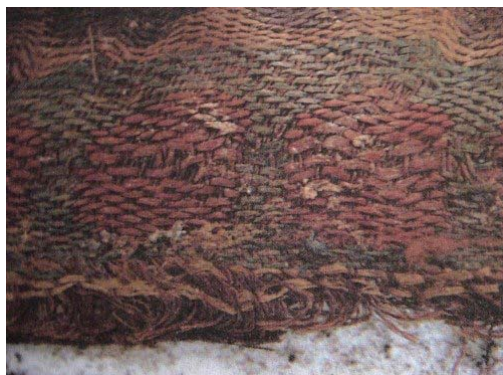


図15 襟飾の緯錦 文様部分
(马特巴巴伊夫・趙豊 2010年より)

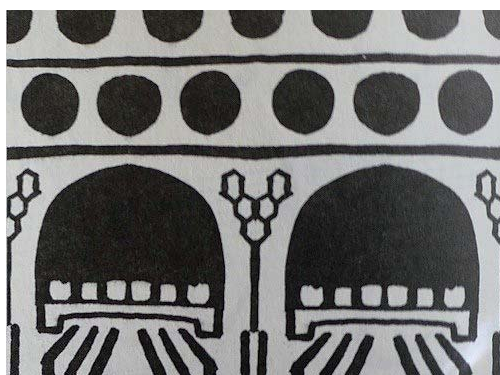


図16 図8の文様書き起こし図
(马特巴巴伊夫・趙豊 2010年より)



図17 平地綾織物①

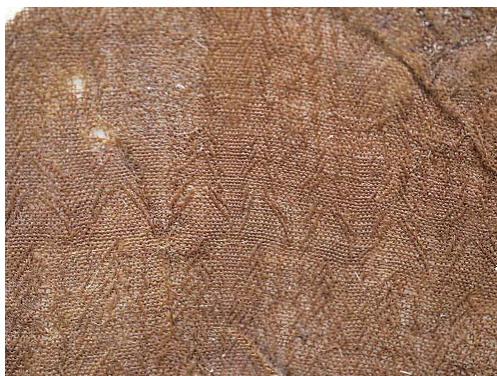


図18 図10の拡大

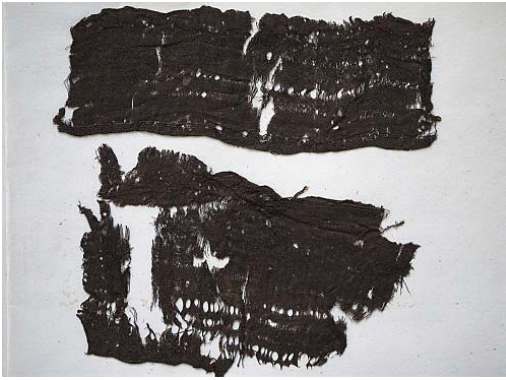


図19 平地綾織物②



図20 図12の拡大

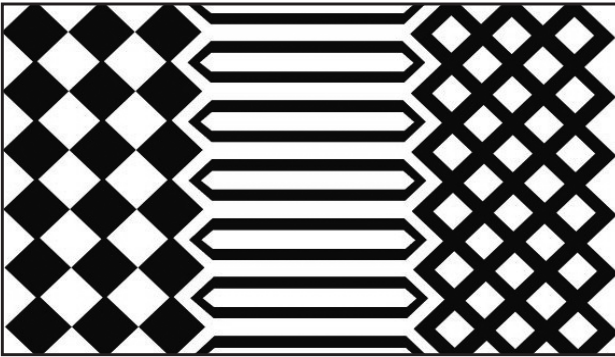


図21 図12の文様書き起こし

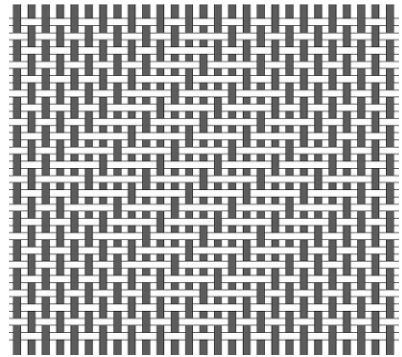


図22 図12の組織図